

## 専門バカが計算した原発事故確率と発電コスト ～1400年の稼働時間を3で割って500年に1度の事故？～

なんだか過激なタイトルだ。穏やかだったはず？の性格がどうも近頃変質してきたような・・・。これも放射能による「風評被害」の一つか。

TV で内閣府原子力委員会が原発事故確率やそれに伴う被害を計算に入れた発電コストのニュースが流れた。さぞかし跳ね上がるだろうと見ていたら、現在より 1.1 円程度割高になる????。計算根拠となった事故確率が 1400 年で 1・2・3 号機が事故を起こした 3 回分で割って 500 年に 1 回????

専門家が事故を計算するとこんな馬鹿げた数字が出てくるのだ！ ～ まずはニュースより ～

### 原発事故コスト、従来の発電費用の2割

読売新聞 10月25日(火)

原子力発電所事故に伴う損害額などを試算する内閣府原子力委員会の小委員会（座長＝鈴木達治郎・原子力委員長代理）は 25 日、日本の原発が過酷事故を起こす確率は最大で 500 年に 1 回で、1 基あたりの標準的な損害額は 3兆 8878 億円、将来の損害に備えるために必要な費用は、従来の発電コストの約 2 割にあたる 1 キロ・ワット時あたり 1・1 円とする試算を発表した。

～ 中略 ～

日本の原発が事故を起こす確率は、**全国の原発がこれまでに延べ時間数で 1400 年あまり稼働してきたなかで福島第一原発 1～3 号機が過酷事故を起こしたことを根拠に、「500 年に 1 回」と算定。**

これをもとに事故に伴うコストを計算すると、1 キロ・ワット時あたり 0・9～1・2 円となった。標準的な稼働率 70% の場合は 1・1 円。こうした事故が起きる確率として国際原子力機関 (IAEA) が新設炉に求める安全目標値は、「10 万年に 1 回」だった。

この計算方法は交通事故確率を、日本の全車の延べ走行時間を元に 1 台の車が事故を起こす確率年数を計算するようなものだ！ 私の頭ではさっぱり理解不能だ。多分、私は普通程度の理解力なので、同じ感覚で聞いた人は相当数になるはずだ。

車の事故確率を計算するなら、[発生した事故数]を[車の台数]で割るのが普通の人の感覚だ。平成 23 年 7 月末現在の日本の車の台数は 78,894,511 台。2009 年交通事故数 736,688 件。これを元に事故確率を計算すれば約 0.93%。100 台のうち 1 台は事故を起こす計算になる。これなら普通の人でも納得できる説明だ。

たとえば「A 車は 10 年に 1 回事故を起こす確率があります。B 車は 20 年に 1 回事故を起こす確率があります。どちらを買いますか？」と言われて、20 年に一回の方の B 車を買った。その帰り道、**運転ミスで事故を起こしたとき「20 年に 1 回のはずだったじゃないか～」と叫ぶ馬鹿はいない。事故は常に不確定な要素で発生するものなのだ。**

福島原発の場合は、40 年の稼働で 1～4 号機が事故を起こしたのだから、1 機あたり 10 年で事故った計算になるのが普通の人々の感覚だ。「1400 年あまり稼働」「500 年に 1 回」などと、馬鹿をいうのも休み休みいってほしい。1400 年前や 500 年前から原発は動いていたのか！

優秀な人たちが集まって、優秀な頭脳で計算すると、500 年に 1 回の確率で起きる事故が、10 年で 1 回の割合で起こってしまったらしい。お勉強ができるとこういう計算ができてしまうのか？ しかし、多くの国民は普通の人だ。普通の人々の暮らしと安全を守るのが国の仕事だ。頼むから普通人の感覚でやってほしい。

素人感覚では「10 年で 1 回の確率」で事故が起きる原発は危ないので直ぐに止めて欲しいと思う。ましてや **500 年先、1400 年先にも私たちの未来の子どもたちが生きている。**その未来を破局的な危機にさらさないでほしい。500 年先、1400 年先にも人々の暮らしが存在することを想像できずに計算しているのだとしたら、狂っているのは優秀なあなたたちの方である。ちなみに**読売新聞は以下の部分を完全にスルーしてアップしている。**近頃「ゴミ売新聞」と揶揄されるのも当然か。都合のいい部分だけしか掲載しない姿勢は昔からだったが、ここまであからさまだと新聞というよりは醜聞に近い。「ゴミ売醜聞」と揶揄されないように「心から応援する」ので「是非」「頑張」ってほしい！

○小委員会メンバーの原子力資料情報室の伴英幸共同代表は「損害費用が少なすぎる。48兆円に達する」として事故コストは 1 キロワット時 **12～16 円と主張した。**

○発電コストは近年、研究者やシンクタンクなどが原子力は 1 キロワット時、**7～12 円程度と試算、**石炭火力や天然ガス火力と大差ないと**の結果が多い。**

## トルコ地震で、隣国アルメニアの原発放射能漏れ

10 月 23 日に発生した「トルコ地震」では、これまでに 5 2 3 人が死亡し、1 6 0 0 人以上が怪我をしたと報じられている。タイの大規模洪水といい、人智を超える自然災害の多発が続いている。「2011 年」は世界史の中に悲劇が多発した年として記録されていくことだろう。自然災害に加えて、原発事故と放射能拡散という深刻な事態が二重の悲劇として人々を苦しめている。報道によれば、トルコ隣国のアルメニア・メツァモール原発が被害を受け放射能漏れを起こしているという。～ 以下 ニュースより ～

トルコ東部で発生した地震により、トルコと国境を接するアルメニアのメツァモール原発が被害を受けました。トルコの新聞ザマンが 24 日曜、トルコ原子力庁の情報筋の話として伝えたところによりますと、23 日曜、トルコ東部で発生したマグニチュード 7. 2 の強い地震のため、**同国とアルメニアの国境地帯にあるメツァモール原子力発電所に、被害が及んでいるということです。**

この報道によりますと、アルメニアの原子力専門家は、この原発の被害を受けた部分の修復作業を開始したということです。さらに、「メツァモール原発からの放射能漏れの量は、それほど多くはないが、緊急速報によれば、この原発の周辺地域で検出された放射能の量は、基準値を超えている」としています。トルコ東部・ワン県で 23 日に発生した強い地震により、これまでに数百人が死亡、他数千名の負傷者が出ています。なお、今回の地震の揺れは、トルコ東部のほか、イランやアルメニアなど、トルコの複数の近隣諸国でも確認されています。

2011 年 10 月 25 日(火曜日) イランラジオ日本語



日本の原発の形を見慣れている私たちににとっては、何とも旧式の古いタイプの原発に見える。原子炉の周りの設備も貧弱だ。冷却系が損傷していれば日本の原発同様、今後、深刻な事態を迎えることになる可能性がある。アルメニアは国境線の 80% が敵対する隣国のトルコに囲まれ、陸の孤島のような状態になっている国だ。エネルギー資源に乏しいため原発の依存度が高く、4 つの原子力発電所で 15 基が稼働中。国内の電力需要の約半分を支えている。

メツァモール原子力発電所は、ソ連型軽水炉 (VVER-440) 2 基からなり、出力はそれぞれ 40. 8 万キロワットで、1 号機は 1977 年から、2 号機は 1980 年から操業を開始しているようだ。**地震多発地帯で、しかも放射能漏れを防ぐ格納容器を持たない旧式タイプで、その危険性からソビエト支配時代の 1989 年には停止が決定していた**が 1991 年にソビエトから独立しアルメニア共和国になった後、エネルギー不足解消のために再稼働していた原発なのだそうだ。

世界にはこうした原発がまだまだ存在している。チェルノブイリ・フクシマ・そして・・・と連鎖的に大規模事故が発生しても不思議ではない。あまり考えたくないが福島第 1 原発事故は、今後、世界で起きる連鎖的な原発事故時代の序章なのかもしれない。日本は、相当数の原発を停止しても経済的に凌げるのがこの夏で証明された。しかし、**アルメニアのような小国では「停止すること」「修理すること」も困難な状況にある。**

「風の谷のナウシカ」のことをこの通信で取り上げたことがある。核エネルギー破壊能力を持つ「巨神兵」の卵を発見し、その破滅的な力で世界制覇を始めた国の名は「トルメキア」だった。アルメニアと何だか名前が似ている。そのアルメニアで原子炉が損傷し放射能が漏れたことに、「風の谷のナウシカ」との因果を感じる。

ナウシカの時代をさかのぼること 1000 年前、人類は「巨神兵」をつくり出し「火の 7 日間」と呼ばれる核による最終戦争を引き起こした。全世界は放射能に汚染され、わずかに生き延びた人類の 1000 年後の世界を描いた名作アニメだった。この宮崎作品が**映画として世に出たのは 1984 年**だった。網走の映画館に出かけて観たのは、私が新採用 2 年目の年である。当時のアニメ映画としては珍しく深く考えさせられる内容だった。しかし、劇場はガラガラで子どもは誰一人おらず、一風変わった風貌の野郎ばかりだったと記憶している。興業収益が上がり直ぐに上映中止となってしまった。それから 2 年後の **1986 年にチェルノブイリ原発事故が発生した。**図らずも「風の谷のナウシカ」は世の注目を集め、宮崎作品はその後、一大ジャンルを築くことになる。この映画のシーンに出てくる「青き衣の者」の予言を最後に紹介する。

「その者 青き衣をまといて 金色(こんじき)の野に降り立つべし。  
失われし大地との絆を結び、遂に人々を青き清浄の地に導かん」

大地と自然を失った福島の地に、再び青き清浄の地が甦り、人々の絆が戻るのは 1000 年後なのかもしれない。世界が滅びる前に「巨神兵」である原子力エネルギーを鎮めるために、私たちは、

青き衣(脱原発の志)をまといて 金色(自然エネルギーの光に満ちた世界)の野に降り立つべし。  
そして 遂に 子どもたちを 青き清浄の地(放射能のない空気・水があふれる故郷)に導かん